

# 新型コロナウイルス禍における国際教育への挑戦

朝 水 宗 彦

周 文 婷  
(山口大学東アジア研究科)

姚 博 怡  
(山口大学東アジア研究科)

李 妍 家  
(山口大学東アジア研究科)

## Summary

Due to the COVID-19, many countries including Japan have reinforced regulations at the borders. As many international students could not enter Japan due to the COVID-19 pandemic, some universities offered online education services as an alternate. On the other hand, since April 2020, many of international students living in Japan have not been able to go back to their countries.

*Keywords:* COVID-19, international students, Japan

## 1 はじめに

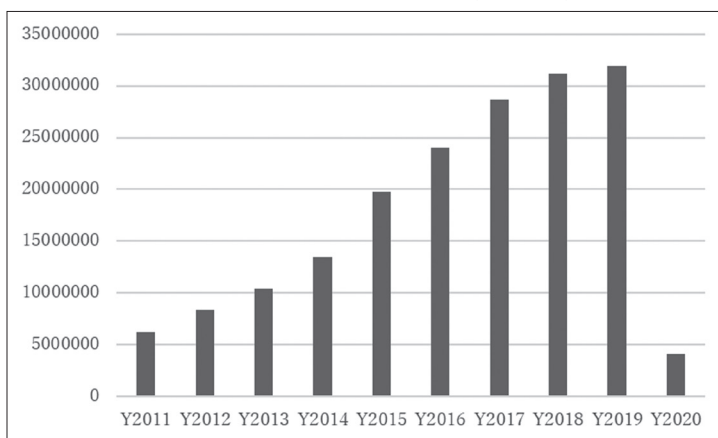
新型コロナウイルスの影響で、日本を含む多くの国々では入国制限が厳しくなった。日本に入国できなくなった留学生のために、代替措置として少なからぬ大学にてオンラインの教育サービスが提供されるようになった。他方、2020年4月以降、すでに来日している留学生が母国に帰国できなくなる現象も起きている。

新型コロナによる、これらの教育上の大きな変化に対し、様々な研究が行われるようになった。本論では、ヒューマン・ライブラリーの手法を応用し、コロナ期における国際教育について、個々の留学生の経験を汲み上げていく。

## 2 本研究の背景

2020年はコロナの影響で訪日外国人が激減した。特に、インバウンド観光客が激減したことに关してはマスコミがしばしば大きく取り上げてきた。JNTOによると、2019年に3188万2049人だった訪日外国人客数は2020年には411万5828人に激減している（図1）。

図1 訪日外国人客数の推移（単位：人）



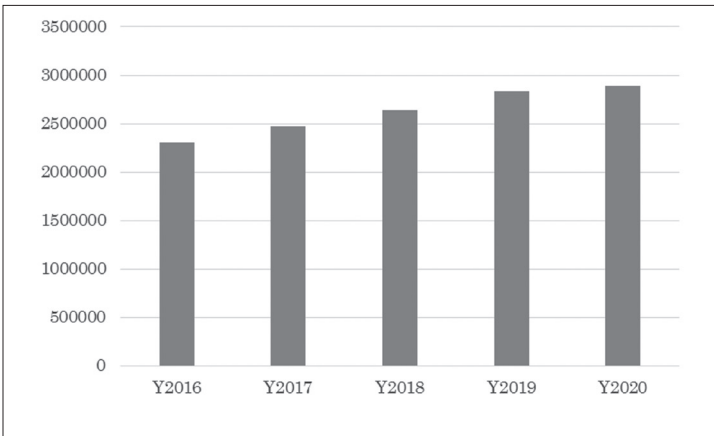
出典：JNTO（2021）「国籍/月別 訪日外客数（2003年～2021年）」

[https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/visitor\\_trends/index.html](https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/visitor_trends/index.html)

ただし、コロナ期における訪日外国人は、短期の訪問者と長期の滞在者では動向が異なっている。出入国在留管理庁によると、在日外国人の数は2020年6月末時点では288万5904人であり、前年同月末の282万9416人からむしろ増加している（図2）。

本研究の対象である留学生の場合もまた、短期訪問者の動向と異なっている。文部科学省の調査によると、日本における留学生の場合、2020年5月1日時点で27万9597人が日本の教育機関に在籍していたが、前年は31万2214人だったため、若干減少している（図3）。つまり、留学生はコロナ禍の影響で減少してはいるが、観光客のように激減はしていない。

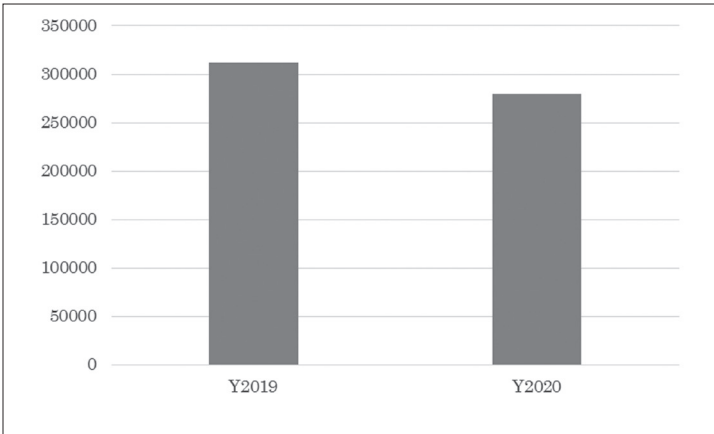
図2 在日外国人数（各年6月末 単位：人）



出典：出入国在留管理庁（2021）「在留外国人統計」

[http://www.moj.go.jp/isa/policies/statistics/toukei\\_ichiran\\_touroku.html](http://www.moj.go.jp/isa/policies/statistics/toukei_ichiran_touroku.html)

図3 日本における留学生総数（各年5月1日現在 単位：人）

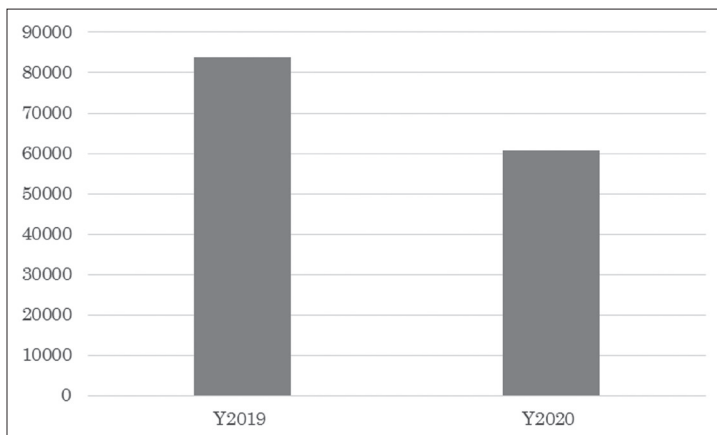


出典：文部科学省（2021）「「外国人留学生在籍状況調査」及び「日本人の海外留学  
者数」等について」（令和3年3月30日）

[https://www.mext.go.jp/content/20210330-mxt\\_gakushi02-100001342-01.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210330-mxt_gakushi02-100001342-01.pdf)

ただし、留学生の場合、留学先の教育機関によってコロナ期の傾向が異なっている。たとえば、日本語教育機関に在籍する留学生は2019年が8万3811人、2020年が6万0814人であり、留学生全体よりも減少率が大きい（図4）。

図4 日本語教育機関における留学生数（各年5月1日現在 単位：人）

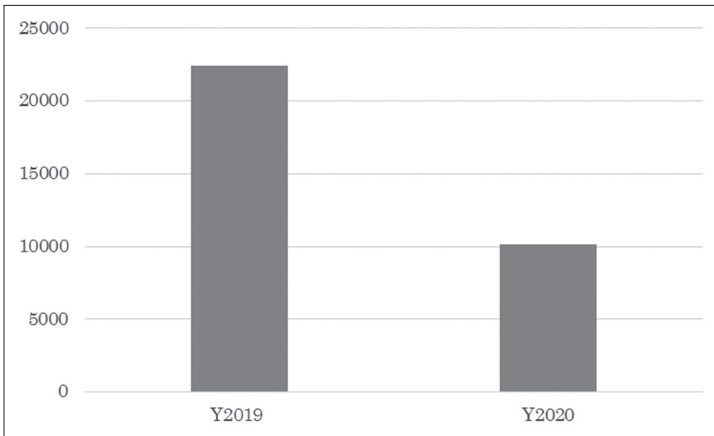


出典：文部科学省（2021）「『外国人留学生在籍状況調査』及び『日本人の海外留学  
者数』等について」（令和3年3月30日）

[https://www.mext.go.jp/content/20210330-mxt\\_gakushi02-100001342-01.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210330-mxt_gakushi02-100001342-01.pdf)

なお、多くの日本人学生にとって、最も身近な留学生はおそらく交換留学生であろう。交換留学生を主とする、学位留学を目的としない学部・短大における非正規留学生の場合、2019年の在学生在が2万2450人、2020年は1万0169人であり、半分以下に激減した（図5）。

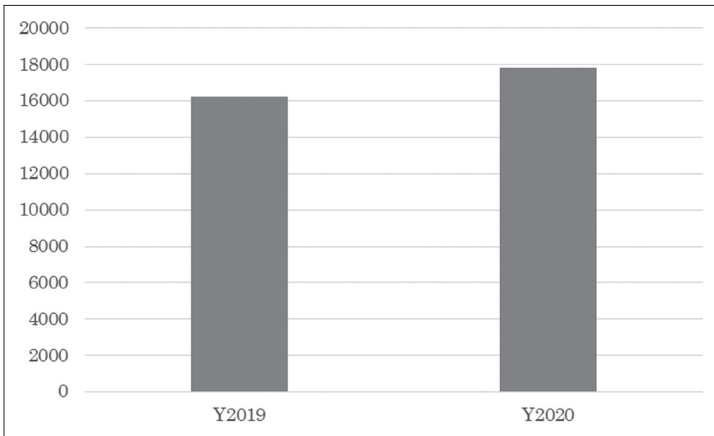
図5 学部・短大における非正規留学生（各年5月1日現在 単位：人）



出典：文部科学省（2021）「『外国人留学生在籍状況調査』及び『日本人の海外留学  
者数』等について」（令和3年3月30日）  
[https://www.mext.go.jp/content/20210330-mxt\\_gakushi02-100001342-01.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210330-mxt_gakushi02-100001342-01.pdf)

他方、博士課程に在籍する留学生の場合、コロナ禍でも在籍数が増加している。2019年における博士課程在籍の留学生は1万6236人であったが、2020年には1万7839人に増加している（図6）。なお、後ほど2020年の留学生の現状についていくつか事例を述べるが、コロナ禍で来日できず、オンラインで学んだ留学生も少なくない。つまり、コロナ期において、在籍者と来日者の数は必ずしも一致しないので、留学生関連の統計を見るときは注意が必要である。

図6 博士課程における留学生数（各年5月1日現在 単位：人）



出典：文部科学省（2021）「『外国人留学生在籍状況調査』及び『日本人の海外留学  
者数』等について」（令和3年3月30日）

[https://www.mext.go.jp/content/20210330-mxt\\_gakushi02-100001342-01.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210330-mxt_gakushi02-100001342-01.pdf)

### 3 コロナ禍と国際教育に関する先行研究

新型コロナによる渡航規制は国際的な教育に対してきわめて大きな影響を及ぼした。そのため、コロナ禍における国際的な教育について、様々な研究が行われている。特に、コロナ禍において、国を越えたオンライン教育が飛躍的に発展し、主要な研究テーマとなっている。

清藤と橋本（2021）は「BEVIを用いたオンライン留学の効果測定」において、徳島大学が実施した海外の協定校とのオンラインの語学研修プログラムの日本人参加者（アメリカ、韓国、台湾）を対象とした調査を行った。それによると、BEVI（The Beliefs, Events, and Values Inventory）による心理分析の測定により、これらのオンライン語学プログラムの参加者には達成感の向上が認められた。

しかしながら、オンラインを用いたバーチャルな留学は元から人気が高かったわけではない。岩城と巽（2021）は「COVID-19による学生の留学に対する意識変化」において、留学希望の日本人学生へのアンケート調査（N

=211) を行った。この調査によると、2020年7月時点で、海外の大学が提供するオンライン授業が留学と同等か聞いた質問に対し、全くそう思わない82人(38.9%)、あまりそう思わない107人(50.7%)というように、肯定的な意見は少なかった(岩城と巽2021:205)。

同様な傾向は、鈴木(2020)「コロナ禍における留学およびオンライン留学に関する学生の意向と現状」でも見られる。同調査によると、留学中および留学希望の日本人学生へのアンケート調査(N=79)では、実施時期が2020年7月の時点だったこともあり、オンライン留学への関心が低かった。しかし、当時はリアルな留学の再開の目途が立っていなかったこともあり、参加するならオンラインの学生交流が含まれているプログラムを重視するという回答もあったとされる。さらに、実際オンライン授業に参加した学生はヨーロッパや北米との時差が大きな問題であるとしていた(鈴木2020:Web)。

なお、ワクチン接種が進んだ国々では、オンラインから対面へいち早く授業が戻ることもあった。そのため、渡部と末松(2021)は、「新型コロナウイルスの留学への影響と留学支援の課題」において、日本人留学生在が日本に帰国前に留学先で受講していたオンライン授業が対面に戻り、授業を受けられなくなってしまった事例なども挙げている。

むしろ、コロナ禍は海外で学ぼうとした日本人だけでなく、日本で学ぶ、あるいは学ぼうとしている留學生にも大きな影響を及ぼした。村田(2021)は「孤立する留學生のオンライン学習支援とソーシャルサポート」にて、都内の大学による留學生受け入れ事例を挙げている。この事例の大学では、来日できなくなった留學生を含め、日本人学生のボランティアがオンラインで日本語会話の教育をサポートし、ミーティングもオンラインで実施している(村田2021:16)。さらに、入国後の隔離期間中の留學生に対するオンラインサポートも行われている(村田2021:18-19)。

ただし、オンラインのサポートにも限界がある。西浦(2021)は「危機状況・パンデミック下での留學生とのカウンセリング・コミュニケーションに

関する一考察」にて、オンライン・サポートの有効性と限界について述べている。要約すれば、コロナ前からすでにカウンセリングを受けていた留学生に対してはZoomでのカウンセリングがうまく機能したが、新規の留学生のカウンセリングでは限界があるとしている。

さらに、先述の文部科学省の留学生統計から見られるように、日本語学校と大学院では留学生の動向が異なる。川西（2021）「コロナ禍における留学生教育の課題－日本語学校、専門学校の現場からの報告－」によると、大学と比べると日本語学校や専門学校ではオンライン授業が少なく、そのため学生が大幅に減少した事例や、オンライン環境の十分ではない学生が多いことなどを指摘している。

各教育機関に加え、留学生を取り巻く地域社会もコロナ禍で大きく変化した。近藤（2020）「新型感染症と留学生のホームステイ」によると、留学生を受け入れていたホームステイ先のホストファミリーが、近所づきあいの関係や集合住宅のコロナ対策等により、ホームステイの受け入れを中断している事例が挙げられている。

なお、コロナ禍と留学に関して、中国人学生に特化した研究事例もいくつか見られる。高と大谷（2021）「新型コロナウイルス感染防止対策・知識に関する調査研究：大阪大学における中国人留学生を例にして」では、筆者たちの勤務先の大学では日本語と英語の両言語が公用語になっているが、緊急事態時の精神的に不安な状況の場合、日英両言語だけでは不十分なことを指摘している。

藤と林（2021）「新型コロナウイルス感染拡大が中国人留学生に与える影響－その生活・心理・行動に着目して－」では、コロナ後の中国人留学生に対するアンケート調査を行っている。中国でいち早く新型コロナウイルスの発症が見つかったことから、中国人学生が周りの日本人に冷たく扱われたり、公共の場であるべく中国語を話さないようにしたりしている例など、日常生活での困難さを紹介している。

これらの先行研究から見られるように、留学希望の日本人、日本に留学し



た外国人、日本語学校で学ぶ外国人、(大学院の)英語プログラムで学んでいる外国人、日本に入国できずにオンラインで学んでいる外国人など、様々な分野でコロナ禍の国際教育について研究されている。アンケートやインタビューで調査を行い、その調査で得られたデータで分析されることが多いようであるが、本論ではより深掘りした分析を行っていく。

## 4 コロナ禍における留学生の困難に関する諸ケース

### 4-1 山口大学におけるコロナ禍の留学事情

ここで、コロナ禍での留学生の困難さについて、山口大学の事例を用いながら個別に紹介したい。筆者(朝水)のゼミでは、2021年7月に、留学生を対象として、コロナ禍での大学生活についてエッセイを募集した。実際には、2020年4月以降に運よく日本に入国できた留学生(特に同年10月の一時緩和)も若干いるが<sup>1)</sup>、多くは4月以降の出入国は厳しくなった。本論では、コロナ禍の留学生に関する大学院での典型的な事例を3つ紹介する。「規制前に入国したケース」は周文婷、「日本に入国できなかったケース」は李妍家、「日本から出国できなかったケース」は姚博怡がそれぞれ担当した。

なお、ある人物が日替わりの講師として自分の独特な経験を聴衆に語っていく教育方法としてヒューマン・ライブラリーがある<sup>2)</sup>。ヒューマン・ライブラリーは通常口述で行うが、中国からの留学生の場合、むしろ文字として記述した日本語の方が得意な学生が少なくない。そのため、筆者のゼミでは、自分の経験を記述させ、印刷物を使いながら紹介していく活動をしばしば行っている。以下の短文はヒューマン・ライブラリーの手法を応用したコロナ禍の記録である。

---

1) 予約したフライトが減便のため何度もキャンセルになったが、辛抱強く予約を繰り返し、ようやく日本にたどり着けたケースや、自腹で14日間ホテルでの隔離生活を行い、その後山口に向かったケースなどもあるが、本論の主題とは異なるので、また別の機会に紹介したい。

2) 障がい者やセクシャル・マイノリティ、少数民族などに対する理解を高めるためにヒューマン・ライブラリーの手法を教育の現場に導入することがしばしば見られる。概要について、朝水と郭(2020: 28-29)を参照されたい。

#### 4-2 規制前に入国したケース

2019年12月において最初の患者が報告されて以来、新型コロナウイルスは既に1年半程続いてきた。

普段は、新歓コンパや入学式などの行事などを通して、新入生たちが仲良くしたり、交流チャンスを増やしたりすることができるはずである。しかしながら、コロナ禍で、一切キャンセルされてしまった。憧れていたものをコロナ禍で潰されてしまったと思われる。その上、授業も対面ではなく、遠距離授業を始めたことにより、先生と同級生とのコミュニケーションも少なくなり、まだ慣れていない学生に対してやる気も前より減ってしまった。それに、フィールドワークもできなくなって、研究が行き詰まったところが多かった。

無論、勉学のみならず、生活に対しても様々な影響が及ぼされた。例えば、バイトが少なめなものさることながら、授業料さえ普段両親から貰えるのを支払うはずであったのが、中々出してくれなかったりして払えなくなったケースが少なくない。悩んだり苦しんだりする学生は大勢いると考えられる。

筆者（周）は2020年3月頭に、日本に入国して大学へ戻った。丁度その際は日本が入国を禁じる前であり、日本はまだ感染状況が拡大していない現状であった。2週間の在宅滞在もなく、福岡周辺のタクシードライバーさんもマスクをかけずに、このウイルスを普通のインフルエンザウイルスのように語っていた時期もあった。

しかしながら、それ以降、入国禁止、県境をまたぐ移動中止、三つの密の回避などをはじめ、緊急事態宣言を何回も開始したり解除したりすることがニューノーマルになっている。その中でも、母国に帰れないことが留学生に対して辛いことである。なぜかというと、国を離れて外国において勉学することはチャレンジでありながら、新年の時に家族団欒することができないからである。元々家族から支えてもらっている分、徐々にプレッシャーに変わっていくようである。

例えば、今の時期に母国に帰れても、飛行機代、PCR検査費用、2週間の

隔離生活費用など、普段の50倍以上かかるのは一般的であるが、学生にとっては負担できるものではない。コロナが新常态とはいえ、学生に対して、生活を言うまでもなく勉学の方も不便なところが多くなってきた。

(周文婷)

#### 4-3 日本に入国できなかったケース

新型コロナ発生後、留学は筆者（李）を含めた多くの留学生にとって負担とストレスになっている。それだけではなく、個人的には両親も筆者の留学に対して心配でたまらない。大切な人に負担と心配をかけたくない筆者のストレスのほとんどはここから来ている。だからこそ、声を大にして言いたいことがある。「この前例のない不安な時期に留学を諦めなかった人は、とても勇気がある」。

新型コロナ流行の影響で、筆者は以前準備していた研究計画を変更せざるを得なくなり、渡日できていない。ここまで頑張れたのは、学校側の柔軟な対応とオンライン授業のおかげである。特に、オンライン授業は、筆者のように入国できない留学生にとっては命綱のようなもので、多くのロスを省くことができた。

中国では、海外に行けず家でオンライン授業を受けている留学生がまだまだたくさんいる。オンライン授業の良い点は、安全であることで、この非接触型の授業方式は、参加者の健康と安全を確保し、授業計画を円滑に進めることを保証できる。他にも、紙の節約、スペースの節約、講義のパワーポイントが見やすくなるなどのメリットがある。以前、対面授業の時、筆者は投影された画面がよく見える教室の良い席を確保するために、いつもかなり早く到着していた。今では、パソコンとインターネットを用意しておけば、時間通りに授業を受けることができ、時間を大幅に節約することができる。

しかし、オンライン授業の問題点も少なくない。健康面では、オンライン授業の場合、パソコンを見つめる時間が長くなるため、長期的には目の健康にも影響が出る可能性がある。授業の流れという点では、インターネットの

状況やパソコンの状態などの技術的な問題で、オンライン授業のペースが突然乱れてしまうことがある。また、オンラインでは、顔の微表情や微妙な声のトーン、ボディランゲージを提示することが難しいので、コミュニケーションにある程度影響を与えることは間違いない。表情といえば、オンライン授業で話している人のカメラがオフ、または角度が原因で表情が見えない場合がある。基本的に、筆者はカメラオンの参加者が半分以上になっているかどうかで自分のカメラを起動するかどうかを決めているが、オンラインの場で顔を隠したい人にとってこのカメラ問題は難しいだろうか。

数日前にWeiboで、Appleの社員がリモートワークに慣れてきたという記事を読んだ。正直なところ、筆者もオンライン授業でのリモート感覚に慣れている。何と言ってもオンライン形式は三密・不特定多数との接触の回避が出来て便利である。しかし、この流れが社会全体の発展にどのような影響を与えるかは誰にも予測できない。唯一言い切れるのは、誰もが新型コロナ発生前の生活には戻れないことだ。

このエッセイを書いている間にも、スマホのニュースでは、観光客の移動により、中国の複数の省に感染者が出ていること、日本で変異株による感染者が急増していること、オリンピック関係者の間で感染者が続出していることなどが報じられている。交通の便が良くなったことが、ある意味で「悪いこと」になる日が来るとは思ってもみなかった。

(李妍家)

#### 4-4 日本から出国できなかったケース

新型コロナウイルス感染症（略称コロナ）は2019年12月に中華人民共和国湖北省・武漢市で初めて検出された新興感染症である。2020年には全世界へ広がっていた。筆者（姚）は2019年9月に山口大学の新生として日本に来てから、コロナのため、一度も中国に帰っていなかった。コロナのため、筆者は来日から2021年7月にかけての二年間近くの間、日本での生活、授業、およびフィールドワークなどに影響を受けている。

まずはコロナの影響による、日本における生活の変化について紹介する。コロナの日本での蔓延は2020年の1月から始まった。その時、筆者はちょうど日本の生活に少し慣れてきて、アルバイトを探そうと思っていた時期であったが、コロナが原因で、いくつかのお店は休みになった。それで、生活費は親からの仕送りで生活しないといけなくなった。それから、外食にもいろいろな不便などがある。例えば、食事の時間が制限され、飲食店の営業時間が短縮されていることなどである。また、コロナの関係で、人とソーシャル・ディスタンスを保つため、いろいろな活動もキャンセルすることになった。しかしながら、外国人の筆者にとっては、ほかの人々、特に日本人との交流はできなくなり、日本に来たからと言って、ちゃんとした文化交流などもできないと言える。

授業の面では、コロナの影響により対面授業はオンライン授業になった。対面授業だったら、先生と検討している間にいろいろな話題が出てくるが、オンライン授業になったら、インターネットのつながりの悪さなどの影響により、ちゃんとしたやり取りもできないため、何となく気まずい空気になりやすく、課題に関する検討も少なくなった。

筆者の研究内容では、フィールドワークは重要な研究方法の一つである。筆者の研究対象は中国貴州省のエスニック・ツーリズムであるため、フィールドワークは地元で行われたいけない。しかしながら、コロナの影響により、現地に行けない状態が続き、オンラインのアンケート調査で済ませることになった。しかし、貴州省のミャオ族は共通語が通じなく、漢字も読めないため、オンライン・アンケート調査は順調に進められないのである。やはり現地に行って、ミャオ族の人々にインタビュー調査を行わないと研究はうまく行かないのである。

以上は筆者が来日から2021年7月にかけての二年間近くの間、コロナによって日本での生活、授業、およびフィールドワークなどに影響を受けていることである。

#### 4-5 考察

ここで、3つのエッセイの各筆者について補足情報を加えながら、コロナ禍における国際教育の問題点について考えたい。

周氏の場合、2020年4月の入国規制の前だったので無事に再来日が可能であった。2020年10月に日本への渡航が一部緩和されたが、高騰した航空券や入国後の隔離のための費用などは私費留学生にとって大きな負担になる。仮に中国へ一時帰国したとしても、中国でのより期間が長く、より厳格な入国後の隔離があり、日本への再入国をした場合はさらに14日間の隔離があるので、時間的にも2020年4月以降の往来は困難であった。むしろ、帰国できないことは留学生にとって大きなストレスになる。

李氏の場合、2020年10月に入学予定だったが、在學生に比べ、新入生の入国許可は厳しかった。新入生として来日ができなかったため、李氏の場合はオンラインで授業を受けているが、2021年度になっても入国ができず、オンライン授業を続けている留学生も少なくない。李氏の場合、在学期間が長い博士課程の学生で、なおかつ小学生のころ日本に住んでいたという有利な点があるので、オンライン教育について比較的好意的な意見を持っている。しかし、在学期間の短い修士課程の学生で、なおかつ日本の教育機関で全く学んだことのない留学生の場合、2年にも及ぶオンライン授業のみで学位を修得するには相当な困難が想定される。

姚氏の場合、コロナの影響で、来日後一度も帰国できていない。帰国できないことは精神的なストレスになるが、大学院生の場合、学位論文の執筆もまた大きな課題である。特に、文化人類学や地理学の場合、現地調査が極めて重要であるため、母国でフィールドワークを計画していた場合、在学期間の延長を含んだ計画の変更や場合によっては研究テーマ自体の変更も考える必要が生じてくる。さらに、姚氏の場合、地元の日本人との文化交流プログラムにしばしば参加していたが、コロナにより多くのイベントは中止になってしまった。日本の生活には慣れてはいえ、自室で淡々とオンライン授業を受ける生活が続けるのも味気ないだろう。

日本に住んでいる周氏、姚氏に共通することであるが、日本で学ぶためには経済的な基盤が重要である。コロナ禍によりアルバイトの時間が削減されたり、アルバイト先自体が倒産してしまうケースが少なからず見られる。博士課程の留学生の場合、比較的年齢層が高く、経済的に自立していることが多いが、修士課程や学部の場合、親からの仕送りに依存している学生も少なくない。母国がコロナで不景気になり、仕送りが滞る事態も十分考えられる。

周氏、李氏、姚氏の3人に共通していることであるが、オンライン授業は万能ではなく、それぞれ問題を抱えている。最初からオンライン授業を前提として入学した場合と異なり、対面での指導を前提として入学した場合、ハード・ソフトの両面から、オンラインでの不便さが見受けられる<sup>3)</sup>。それでも本論で挙げた3人はオンライン化に比較的うまく対応できた例であるが、実際にはWi-Fi環境などの技術的な点や、オンラインでのコミュニケーションに精神的な苦痛を感じた点など、様々な問題から学業の継続が困難になったケースも少なくない。オンラインに適合できなかったケースについては、本論では十分掘り下げることができなかったため、また別の機会に解明したい。

## 5 おわりに

以上、コロナ期における国際教育の問題点について、留学生に対するエッセイを用いながら分析してきた。コロナ禍で、キャンパスが閉鎖されたこともあり、多くの大学でオンライン授業が導入されたが、この新たな教育手段は日本に入学できない留学生にとっても有効に働いた。他方、来日後日本に住んでいる留学生にとって、コロナ禍での社会変化は日常生活にも大きな変化をもたらした。

---

3) 山口大学はコロナ対策としていち早く授業のオンライン化に取り組んできた。事前に準備を進めていた経済学部は2020年度4月の新学期の初日の授業から、共通教育は新学期の2日目の授業からオンライン教育を提供している。

なお、コロナ禍においてエッセイを提供できた留学生は、コロナ禍での新たな生活スタイルに比較的うまく対応できた留学生である。実際には、留学生、日本人を問わず、コロナ禍での大きな社会変化にうまく対応できず、より困難な学生生活を送っている人々もいる。本論ではオンライン教育化への不適合など、より深刻なケースについて十分扱っていないため、この点に関しては今後の課題としたい。

### 参考文献

- 朝水宗彦, 郭淑娟 (2020) 「インバウンド訪問者のための日本文化関連の諸体験」『山口経済学雑誌』 68 (5), 25-40
- 高誉文, 大谷順子 (2021) 「新型コロナウイルス感染防止対策・知識に関する調査研究：大阪大学における中国人留学生を例にして」『大阪大学高等教育研究』 9, 13-30
- 岩城奈巳, 巽洋子 (2021) 「COVID-19による学生の留学に対する意識変化」『名古屋高等教育研究』 21, 187-206
- JNTO (2021) 「国籍/月別 訪日外客数 (2003年～2021年)」 [https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/visitor\\_trends/index.html](https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/visitor_trends/index.html), 2021年7月30日閲覧
- 清藤隆春, 橋本智 (2021) 「BEVI を用いたオンライン留学の効果測定」『高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班紀要・年報2020』 12-21
- 近藤佐知彦 (2020) 「新型感染症と留学生のホームステイ」『グローバル人材育成教育研究』 8 (1), 77-83
- 文部科学省 (2021) 「「外国人留学生在籍状況調査」及び「日本人の海外留学者数」等について」(令和3年3月30日) [https://www.mext.go.jp/content/20210330-mxt\\_gakushi02-100001342-01.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210330-mxt_gakushi02-100001342-01.pdf), 2021年7月20日閲覧
- 村田晶子 (2021) 「孤立する留学生のオンライン学習支援とソーシャルサポート」『多文化社会と言語教育』 1, 14-29
- 西浦太郎 (2021) 「危機状況・パンデミック下での留学生とのカウンセリング・コミュニケーションに関する一考察」『甲南大学学生相談室紀要』 28, 49-61
- 出入国在留管理庁 (2021) 「在留外国人統計」 <http://www.moj.go.jp/isa/policies/statistics/>



toukei\_ichiran\_touroku.html, 2021年7月30日閲覧

鈴木規子 (2020) 「コロナ禍における留学およびオンライン留学に関する学生の意向と現状」

『早稲田ウィークリー』 24 SEPTEMBER 2020, <https://www.waseda.jp/inst/weekly/news/2020/09/24/78108/>, 2021年7月20日閲覧

藤媛媛, 林萍萍 (2021) 「新型コロナウイルス感染拡大が中国人留学生に与える影響 - その生活・心理・行動に着目して -」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』 7, 47-56

渡部由紀, 末松和子 (2021) 「新型コロナウイルスの留学への影響と留学支援の課題」『東北大学 高度教養教育・学生支援機構 紀要』 7, 91-99